



ブルターニュの光と風

画家たちを魅了したフランス〈辺境の地〉

アルフレッド・ギユ (1844-1926) 《さらば!》(部分)
1892年 油彩/カンヴァス 170×245 cm

2023 **3.25** | Sat | — **6.11** | Sun |

*La lumière et le vent en Bretagne,
collection du musée des beaux-arts
de Quimper*

自然、風土、暮らし、祈り…

フランスの内なる“異世界”を“発見”する



カンペール美術館コレクション、来日!

豊かな自然と独自の文化を持つことで知られる

フランス北西部の地、ブルターニュ。

本展は、ブルターニュに魅了された画家たちが描いた作品を通じ、

同地の歴史や風景、風俗を幅広くご紹介する展覧会です。

深緑の海や険しい断崖が連なる海岸線、平原と深い森とが織りなす固有の景観、

また、そこに暮らす人々の慎ましい生活と敬虔な信仰心は、

19世紀初め以来、数多くの画家たちの関心を掻き立ててきました。

本展では、ブルターニュに関する作品を多数所蔵するカンペール美術館の作品を中心に、

45作家による約70点の油彩・版画・素描を通じて、

フランス「辺境の地」ブルターニュの魅力をご覧ください。

開催概要

展覧会名 **ブルターニュの光と風** —画家たちを魅了したフランス〈辺境の地〉

会 期 **2023年3月25日(土)～6月11日(日)**

会 場 **SOMPO美術館** 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1

休 館 日 月曜日

開館時間 **午前10時～午後6時** (最終入館は午後5時30分まで)

観 覧 料 **一般1,600(1,500)円、大学生1,100(1,000)円、高校生以下無料**

※()内は事前購入料金

※事前購入券は公式電子チケット「アソビュー!」、ローソンチケット、イープラス、チケットぴあなどでお買い求めいただけます。詳細は美術館ホームページをご確認ください。

※身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳を提示のご本人とその介助者1名は無料、被爆者健康手帳を提示の方はご本人のみ無料

主 催 **SOMPO美術館、フジテレビジョン**

協 賛 **SOMPOホールディングス**

特別協力 **損保ジャパン**

後 援 **在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本、新宿区**

企画協力 **ホワイトインターナショナル**

ホームページ **<https://www.sompo-museum.org/>**

開館時間 **050-5541-8600** (ハローダイヤル)

アクセス **新宿駅西口より徒歩5分**

年表

ブルターニュの歴史と19世紀フランス美術界の動き

- 4-6世紀 アングロ・サクソン人に追われたケルト系ブリトン人がブリテン島からブルターニュ半島に移住。
- 845年 ブルトン人貴族ノミノエが西フランク王国軍を破り、ブルターニュ公国を築く。
- 851年 ノミノエ没。息子エリスポエが西フランク王国軍を破り、ブルターニュ王国を築く。
- 939年 ブルターニュ公アラン2世はフランス王ルイ4世に臣従を誓い、以降ブルターニュは王国から公国となる(都:ナント)。
- 1337年 英仏百年戦争が始まる。4年後、ブルターニュ継承戦争が始まる。
- 1491年 アンヌ・ド・ブルターニュ、フランス国王シャルル8世と結婚。シャルル没後、ルイ12世と再婚(1499年)。
- 1532年 ブルターニュ公国、フランス王国に統合される。
- 1789年 フランス革命。ブルターニュ公国が法的に廃止され、すべての特権も失う。
- 1793年 ブルターニュ各地で革命政権に対して反乱が起きる(ふくろう党の反乱)。
- 1804年 ナポレオンが皇帝即位、第一帝政成立。
- 1833年 ミシュレ『フランス史』(第一巻)刊行。
- 1839年 ル・アーヴル-モルレー間に海上交通が開通。ラ・ヴィルマルケ「ブルターニュ古謡集 パルザス=プレイス」刊行。
- 1841年 チューブ入り絵具の発明。
- 1848年 二月革命。ルイ=ナポレオンが大統領就任。第二共和政成立。
- 1851年 レンヌ-プレスト間、ナント-カンパール間の鉄道が開通。この頃から、夏にブルターニュを訪れる画家が増加。
- 1852年 ルイ=ナポレオン、皇帝即位。第二帝政成立。
- 1857年 パリ-レンヌ間の鉄道が開通。
- 1862年 パリ-カンパール間の鉄道が開通。
- 1863年 フランス政府からブルターニュの風俗画家アドルフ・ルルーに《ブルターニュの婚礼》(広報用画像2)が依頼される。
- 1864-65年 カンパールまで(1864年)プレストまで(1865年)鉄道が開通。
- 1870年 普仏戦争勃発。翌年、パリ・コミューン、第三共和政成立。
- 1872年 カンパール美術館開館。
- 1874年 第1回印象派展開催。
- 1886年 第8回(最後の)印象派展開催。ゴーギャンの最初のボン=タヴァン滞在。モネ、バル=イル島に滞在。
- 1888年 モレ、セリュジエ、ベルナルルら、ボン=タヴァンに滞在。セリュジエ、ゴーギャンの教えをパリに持ち帰り、ドニロアカデミー・ジュリアンの仲間とナビ派を結成。
- 1903年 サロン・ドートンヌ創設。ゴーギャン回顧展開催。
- 1905年 第3回サロン・ドートンヌで第7室にマティスらの作品が展示され「フォーヴ(野獣)」と呼ばれる。
- 1914年 第一次世界大戦勃発。
- 1941年 ロワール=アトランティック県(中心都市ナント)がブルターニュの他の県から切り離される。
- 1956年 ナントとその周辺地域圏を除き、ブルターニュはブルターニュ地域圏として再編。

みどころ

1 “ディープな”フランスを知る

フランス北西部に位置するブルターニュは、日本ではあまり知られていない地域かもしれません。豊かな自然と独自の文化を持つこの〈辺境の地〉は、19世紀のフランスにおいてもある種の「内なる異世界」として、エキゾティシズムに満ちた眼差しの下に見い出されてきました。本展では、そうしたブルターニュの歴史・自然・風俗を、画家たちの眼差しを通して追体験するように、ご覧いただけます。

みどころ

2 “ゴーギャン”“ボン=タヴァン派”だけではない!

ブルターニュは、ゴーギャンやボン=タヴァン派の画家たちが集い、総合主義が生まれたフランス近代絵画史上の重要な地として知られています。しかし彼らの前後の時期にも、ブルターニュの豊かな自然風土とそこに生きる人々の姿に魅了された画家たちは数多くいました。本展では、およそ1世紀のあいだに様々な様式で描き出されたブルターニュの姿をご紹介します。とりわけサロンを活動拠点とした画家たちによる大画面は圧巻です。

みどころ

3 フランス、カンパール美術館から一挙来日!

1872年に開館した歴史あるカンパール美術館は、ボン=タヴァン派のみならず、ブルターニュに関連する絵画を多数所蔵していることで知られ、その充実度はフランス随一を誇ります。フランスから遙々来日した珠玉のコレクションをお見逃しなく。

英仏海峡



19世紀前半、ロマン主義の文学者たちが「未知なる土地」や「異郷」として描き出したブルターニュは多くの画家を刺激し、彼らはエキゾティシズムに満ちた眼差しの下に、その姿を捉えていきます。多様な風景と、ブルトン語を話し、ケルトの伝統が色濃く残る風習のなかで生きる人々に対する関心の高まりは、やがてサロン(官展)におけるブルターニュ絵画の流行へと繋がりました。

画家たちが最初に求めた風景は、深緑の海を臨む岬の絶景や岸壁に打ち付ける波といった、激しい嵐の光景です。古くから伝わる伝説や民間伝承は、ブルターニュの沿岸地域が常に海の脅威と隣り合わせにあったことを伝えていますが、サロンで活躍したアカデミズム系の画家たちは、厳しい自然と共に生きる人々の姿を、確かな描写力によって克明に描き出し、人気を博しました。他方、荒野、森、耕作地などが織りなす内陸部について、画家たちは荒涼とした大地を繰り返し描くことで、不毛な大地というブルターニュの典型的なイメージを作り上げていきます。急速な近代化に背を向けるかのように素朴な生活を続ける人々の暮らしぶりや、「パルドン祭」に象徴される人々の信仰心の篤さも、魅力的な画題として繰り返し描かれました。



広報用画像 1
テオドール・ギュダン(1802-1880)
《ベル＝イル沿岸の暴風雨》
1851年 油彩/カンヴァス 131.5×202.5 cm



広報用画像 2
アドルフ・ルルレー(1812-1891)
《ブルターニュの婚礼》
1863年 油彩/カンヴァス 138×203 cm

生涯にわたってブルターニュをテーマに制作を続けたアドルフ・ルルレーは、市場、結婚式、巷の喧嘩など、人々の日常生活の描写を得意とし、「ブルターニュのルルレー」とあだ名されました。ルルレーがサロンにブルターニュの作品を出品したことは、1840年代以降のサロンにおけるブルターニュ主題の流行のきっかけとなります。農民の婚礼を描いた本作は、フランス国家の注文により描かれたものです。葦葺き屋根が連なる農村の一角を舞台に、手を取り合い伝統的な踊りを披露する男女、伝統楽器を演奏する音楽隊、子供を連れ立ち話をする女性などが、鮮やかな色彩と丹念な細部描写によって捉えられ、祝いの場の享乐的で躍動的な雰囲気をよく伝えています。



広報用画像 3
ジャン＝マリー・ヴィラール(1828-1899)
《ドゥアルヌ近郊のケルレゲールの岩場》
1878年 油彩/カンヴァス 60×90 cm

ブルターニュ半島西部のドゥアルヌネに生まれたジャン＝マリー・ヴィラールは、はじめ地元で教職に就いていましたが、1850年代半ばにパリに上京して画家の道を目指しました。その作品の多くは故郷の風景を描いたもので、本作もドゥアルヌネ近郊にある岩場を描いた1点です。点在する木々の合間に花崗岩が露出する特異な景観はこの地域特有のものですが、ヴィラールはこの怪しい眺めに牛飼いと牛を小さく挿入し、清らかな陽光に満ちた大気を巧みに捉えることで、静かな叙情性を表現しています。



広報用画像 4 (表紙使用画像)

アルフレッド・ギユ (1844-1926)

《さらば!》

1892年 油彩/カンヴァス 170×245 cm

アルフレッド・ギユは、ブルターニュ半島西部のコンカルノーに生まれ、パリでアレクサンドル・カパネル (1823-1889) のもとで学びました。普仏戦争後の1871年に再び故郷へ戻り、漁師など、海と共に生きる人々が慎ましくも遅くも生きる姿を描き続け、同じく本展第1章でご紹介するテオフィル・ディロール (1844-1920) と共に、同地の芸術家コロニーの中心的存在となりました。《さらば!》と題された本作は、嵐に遭遇した一艘の漁船に乗った父子の別れの場面をドラマティックに描き出しています。転覆した船体にしがみつき、激しい波と格闘しながら海の犠牲となった我が子を抱きかかえる父親は、その額に最後の口づけをしています。本作はまさにブルターニュの厳しい自然と人間との相克を描き出し、1892年のサロンで国家買い上げになるなど、高い評価を得たギユの代表作です。



広報用画像 5 (裏表紙使用画像)

リュシアン・レヴィ＝デュルメール (1865-1953)

《パンマルの聖母》

1896年 油彩/カンヴァス 41×33 cm

陶器の絵付けの仕事のかたわら、ラファエル・コラン (1850-1916) のもとで学んだリュシアン・レヴィ＝デュルメールは、神秘的な詩情を滲えたメランコリックな女性像によって名声を博した象徴主義を代表する画家です。本作では、パンマルの岬を望むサン＝ゲノレの浜を背景に、ビッグダン地方の伝統衣装に身を包んだ聖母子が描かれています。伝統的な聖母子像にブルターニュの人々の敬虔深さが重ね合わされた、印象深い作品です。

column カンペール美術館について



© musée des beaux-arts de Quimper

ブルターニュ半島最西端、フィニステール (「最果ての地」の意) 県にあるカンペール美術館は、1872年に開館しました。その歴史は、同地出身のジャン＝マリー・ド・シルギー伯爵 (1785-1864) のコレクション (約1200点の絵画、2000点の素描) が1864年にカンペール市に遺贈されたことに始まります。1842～52年に集中的に収集されたシルギーのコレクションは、15～19世紀のヨーロッパ各国のオールドマスターによる絵画作品が主でした。今でこそ同館はブルターニュをテーマとする絵画を数多く所蔵することで知られていますが、それは、失われつつあるブルターニュの伝統の保存に意識的であった歴代館長の尽力によるところが大きかったです。フランス国内各地の美術館に散逸していた作品をカンペールに移管し、第二次世界大戦後にはポン＝タヴァン派の作品を購入するなど、ブルターニュ絵画のコレクションを充実させてきました。

日本でも高い知名度と人気を誇るポール・ゴーギャンやポン＝タヴァン派の画家たちによる作品群は、同館のコレクションを彩るハイライトのほんの一部に過ぎません。ゴーギャン登場以前からブルターニュ絵画の収集を行っていた同館には、19世紀のサロンで活躍したアカデミズム系の画家や、20世紀に入ってもなおブルターニュの諸相をさまざまな様式で描き続けた新たな世代による作品が集まり、フランス〈辺境の地〉の魅力を今に伝えているのです。

ブルターニュの土着的な習俗や自然は画家たちに格好の題材を提供しましたが、とりわけ大きな魅力である果てしない海と空の広がり、持ち運び可能な画材を携えて各地を旅をした風景画家たちの心を捉えるようになります。港町で育ち、海を愛したウジェーヌ・ブーダンが素早く的確に描きとめた空の様子は、印象派に先駆けた自然描写となりました。

ポスト印象派のポール・ゴーギャンは、「原始的なもの」への憧れを異邦に求めて最終的にはタヒチまで渡りますが、その前段階として、フランス国内の異邦と言えるブルターニュへ赴き、1886年には小村ポン＝タヴァンに辿り着きます。同地に滞在していたエミール・ベルナルやポール・セリュジエらとの出会いは、太く明確な輪郭線と平坦な色面構成を特徴とする「クロワジニスム」を作り上げ、彼ら「ポン＝タヴァン派」の誕生によって、ブルターニュは近代絵画史上にその名を刻むことになるのです。さらに、ゴーギャンの教えをセリュジエがパリに持ち帰ったことは、ピエール・ボナールやモーリス・ドニらによる「ナビ派」誕生へとつながり、彼らは、心象的なイメージを重ねじ色面と線で大胆に表現する手法をさらに展開することで、印象派に代わる新たな表現世界を作り上げていきました。



広報用画像 6
ポール・セリュジエ (1864-1927)
《さようなら、ゴーギャン》
1906年 油彩/カンヴァス 65×92 cm



広報用画像 7
アンリ・モレ (1856-1913)
《ポン＝タヴァンの風景》
1888-89年 油彩/カンヴァス 39.5×59.5 cm

ノルマンディーに生まれたアンリ・モレは、兵役時代をブルターニュで過ごしたのち、パリの国立美術学校でジャン＝レオン・ジェローム (1824-1904) に学びました。ブルターニュの南海岸の風景に魅せられたモレは、1886年にル・プールデュに、ついで1888年にはポン＝タヴァンに移り住み、ポール・ゴーギャンやエミール・ベルナルらと交流し、彼らの総合主義に影響を受けます。家々の屋根がのぞく起伏のある草地で牛がゆったりと草を食む牧歌的な光景を描いた本作は、簡素な構図と色面構成による平面的な画面づくりが意識され、ゴーギャンの様式に接近していたことを示しています。



広報用画像 8
モーリス・ドニ (1870-1943)
《フォルゲットのパルドン祭》
1930年 油彩/カンヴァス 54.5×82.5 cm

ナビ派を代表するモーリス・ドニが最初にブルターニュの地を踏んだのは早くも1883年です。自身も敬虔なカトリック教徒であったドニは、ブルターニュの人々の信仰の篤さに強く惹かれ、とくに1921年から34年には半島最西端に近いフォルゲットに毎年のように通い、ブルターニュ特有の宗教行事「パルドン祭」を描きました。祭りの最中に催されるミサでは、本作に描かれるように、民俗衣装姿の人々が、祭壇の前に置かれた聖母子像に触れたり、口づけしたりしました。

ゴーギャンが去った後のブルターニュで制作に励んだ画家たちは、パリの美術動向と歩を合わせるかたちで様々な絵画表現を試みました。1870年代に誕生した印象派、ついで1880年代に登場した新印象派の様式を特徴付ける明るい色彩と筆触は、ポン＝タヴァン派の画家たちにおいても継承され、マキシム・モーフラやフェルディナン・ロワイヤン・ピュイゴドーらによる風景画の中で、さらなる展開を見せました。1880年代に民営化されたサロンでは、旧来のアカデミックな表現を脱した新たな表現の可能性が模索されますが、シャルル・コッテやリュシアン・シモンに代表される世紀末に台頭した「バンド・ノワール(黒い一団)」と呼ばれる一派は、ブルターニュを拠点とし、ギュスターヴ・クールベやオランダ絵画からの影響の下、暗澹たる風景を描きました。20世紀に入ると、フォーヴィスムやキュビズムなど、さらに前衛的な絵画表現が展開されますが、こうした動向はブルターニュの画家にも無縁ではなく、民族衣装姿の女性など、ブルターニュの典型的なイメージが新たな様式で繰り返し描かれ続けたのです。



広報用画像 9

リュシアン・シモン (1861-1945)

《ジャがいもの収穫》

1907年 油彩/カンヴァス 102×137 cm

パリに生まれ、アカデミー・ジュリアンに学んだリュシアン・シモンは、本展第3章でご紹介するアンドレ・ドーシェ(1870-1948)の姉と結婚したことを機に、ブルターニュにしばしば滞在しその土地の風景を描くようになります。本作では、半島最西部のビッグダン地方パンマールの人々がジャがいもを掘り、袋に詰め、運搬するという収穫の諸段階が描かれています。シモンの眼差しは、地平線の向こうから潮風が吹き寄せる痩せた大地で働く人々の日常を決して理想化することなく、克明に捉えています。



広報用画像 10

シャルル・コッテ (1863-1925)

《嵐から逃げる漁師たち》

1903年頃 油彩/厚紙 54×75 cm

パリの国立美術学校やアカデミー・ジュリアンに学んだシャルル・コッテは、1880年代に開始した制作旅行のなかでブルターニュを発見し、その風俗描写によって評価を高めた画家です。怪しい雲行きから嵐の到来を察知した漁師たちが、舟を引き上げ帰路につく様子を描いた本作は、「バンド・ノワール」の画家コッテの特徴である暗く抑制的効いた色調で表現されています。画家はここで、嵐そのものでも、嵐が招くであろう悲劇のあとの出来事でもなく、嵐の前の張りつめた瞬間を描いています。



広報用画像 11

フェルディナン・ロワイヤン・デュ・ピュイゴドー (1864-1930)

《葉ぶき屋根の家のある風景》

1921年 油彩/カンヴァス 81.5×60.5 cm



広報用画像 12

ピエール・ド・ブレ (1890-1947)

《ブルターニュの女性》

1940年 油彩/カンヴァス 73×63 cm



リュシアン・レヴィー・デュルメール(1865-1953) 《ハンマールの聖母》 1896年 油彩/カンヴァス 41×33 cm

| プレスお問い合わせ |

「ブルターニュの光と風」展広報事務局 (ウインダム内)

TEL: 03-6661-9447 FAX: 03-3664-3833 e-mail: sompo-m-pr@windam.co.jp

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9 ヤマナシビル4階

※下記に移転いたします

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町2-14-11-2階
(2023年1月15日~)